

豊岡地区における農村RMOの形成 ～定住人口を増やす取組について～

静岡文化芸術大学文化政策学部文化政策学科 都市・地域ゼミ

指導教員：教授 藤井康幸

参加学生：牛木みちる、兼高晴香、栗山紫央里、酒井美緒、
下位凌、高木琉暉、長橋成代、安岡航輝

1 要約

豊岡地区における農村防災RMOの活動支援を目的に、防災・治山治水、関係人口・定住人口の増加策について調査した。豊岡地区視察や事例調査を踏まえ、ワークショップでは森林の維持管理、里山ツーリズムについて提案し、意見交換をした。また、地域のイベントに参加し、地域内外の人材と地域づくり組織のあり方を検討した。そして、より多くの住民の参画と関係人口・定住人口の創出を趣旨に、SNS(Instagram)で情報発信した。10月に「農村防災RMO研究会」が発足したところであり、今後は住民への聞き取りや現地視察を通じて、農村RMOとして取り組むべき地域活性化策の提案と事業化を目指したい。

2 研究の目的

豊岡地区は人口減少と高齢化の進む地域であるが、海老芋や柿などの農産物、里山の風景、遠州大念仏などの地域資源がある。また、天竜浜名湖鉄道の複数の駅や新東名スマートICがあり、都市部からの交通アクセスが良好なため、関係人口や定住人口を呼び込める可能性がある。だが、地形的に河川氾濫のおそれがあり、財産区の維持管理などの課題も抱えている。本研究は、文献調査や現地調査、先行事例の研究を通じて、農村RMO*の活動を支援することを目的とした。

* 農村RMO (region management organization) とは、地域の暮らしを守るため、地域で暮らす人々が中心となって形成され、地域内の様々な関係主体が参加する協議組織が定めた地域経営の指針に基づき、地域課題の解決に向けた取組を持続的に実践する組織とされる（農林水産省）。

3 研究の内容

本研究においては以下を実施した。

(1) 現地でのワークショップ、地域イベント参加、参考事例視察

豊岡東地区環境保全協議会、磐田市自治会連合会、磐田市役所、静岡県、地元企業、住民らの参加する延べ6回のワークショップに参加した。

1) ワークショップ

農村防災RMOプロジェクトおよび農村連携促進支援事業について説明がなされた。ゼミ生は農村における防災・減災について発表し、出席者から豊岡地区の現状や企画立案に関する助言を得た。防災については外部講師を招き、防災に関する建築やコミュニティのあり方について講演を伺い、災害時に取るべき行動や減災への取組を学んだ。財産区の維持管理と里山ツーリズムの2つのテーマについて発表では、出席者からは森林組合との協力や地域資源の活用方法に関する助言を得た。また、視察を踏まえた森林管理の方法について発表し、農村防災の一環として森林を管理するとよいと助言を得た。

2) 地域住民参加の防災体験イベント 農村防災RMO研究会第1回WORK SHOP DAY

テント張り、焚き火、湯沸かし、防災キャンドルづくり、防災ロープワークといった災害時に役立つアウトドア体験、地元のジビエを使った料理の提供、E-MTB（電動マウンテンバイク）による地域森林ツアーが実施され、幅広い世代が防災を様々な角度から学んだ。

(2) 地域イベント参加

1) いわたおんぱく

獅子ヶ鼻公園を散策し、地域資源を確認するとともに、小学生参加のもと松ぼっくりツリーを作った。参加ゼミ生が小学生親子と交流しつつ、工作を楽しみながら地域の自然について学んだ。WAKUWAKU理科教室inいわたおんぱくに参加し、豊岡地区に研究開発拠点を持つ地元企業の地域貢献の取組を学んだ。

2) 山の講

大平山の神祠で行われた山を生業とする人々が山の神を祭る行事である山の講を見学した。終了後の直会では、住民から森林管理をはじめとする地域課題について伺った。

3) 豊岡地区の地域資源の確認

幕末期に造り酒屋として栄えた庄屋の屋敷である花咲乃庄、地場製品の販売所である白壁館、とよおか採れたて元気むら、トレッキングコースのある獅子ヶ鼻公園を視察した。花咲乃庄の母屋は国登録有形文化財に指定されている。視察を通じて、豊岡地区の地場製品や自然、歴史的文化財などの地域資源を確認した。

(3) 参考事例の視察

豊岡地区の農村RMOの活動支援や、防災・治山治水に向けた取組、関係人口・定住人口創出のための活動について検討するため、川根本町と島田市を視察した。

1) 川根本町役場（川根本町）

川根本町は人口約5,800人であり、いわゆる消滅可能性自治体とされている。役場横断の人口減対策ワーキングを設置し、なされた提言の施策への反映を検討中であった。

主要産業であるお茶の販路拡大を図るとともに、栽培研修会や有機認証取得に向けた研修、初期費用の支援を通じた有機栽培が推進されている。

2) 株式会社KAWANEホールディングス（川根本町）

事業を通じて地域課題を解決するという経営理念に基づき、川根本町の課題解決や魅力向上、活性化に携わる。具体的には、関係人口・定住人口の増加を目指し、海外インターン生の受け入れ、移住支援などを行っている。地域内外の人々を結びつける際には、地域外・海外の人であるという理由で特別視しないことが重要であるとあった。

3) NPO法人かわね来風（川根本町）

地域の母親や高齢者のサポート事業やキャンプ場の運営等を通して、持続可能な地域と暮らしの実現を目指し活動している。資金の調達方法や事業展開、多世代の交流を促進する取組について伺った。住民の属性やライフステージに合った役割を地域内で創出することが目指されている。

4) くのわき未来の会事務局（川根本町）

人口減少の進行する地域における地域づくり活動を調査するため、川根本町南部の久野脇地区で活動する地域づくり組織を視察した。縁結びの村として、住民の活動に対する理解促進を重視し、地区内の活動内容などを取り上げた瓦版が発行されている。

5) 島田市山村都市交流センターささま（島田市）

地域資源を活用した観光手法や、組織と地域の関わり方を検討するため、地域活動の場となっている宿泊体験施設を訪問した。地域の人的・資源的容量を考慮しつつ、既存の地域資源や日常生活を体験プログラムとして提供し、地域文化の価値の再認識と発信、持続的な関係人口の創出に取り組まれている。

6) 森林組合おおいがわ（島田市）

森林の維持管理や材木の活用について検討するため、志太榛原地域の森林整備や木材活用を推進する協同組合を訪問し、林業の現状と課題、間伐材をはじめとする木材の利用方法、森林環境教育の現状と課題などについて伺った。

(4) 情報発信

1) Instagramを用いた情報発信

豊岡東交流センターのInstagramを活用し、農村防災RMO研究会のワークショップやイベントなどの活動内容を発信した。また、地域の交流促進の一環として、豊岡東交流センターでのイベントや、今年度初開催のいわたおんぱくをはじめとする地域イベントの様子を投稿し、豊岡地区の魅力を発信した。

2) 交流センター展示、学内展示

ゼミや農村防災RMO研究会の活動について住民に周知するため、今年度の活動内容を豊岡東交流センターにて展示した。また、関係人口創出の一環として大学構内で豊岡地区の魅力を発信するポスターを展示した。



4 研究の成果

(1) 当初の計画

当初の計画として、①統計データ等の分析による豊岡地区の現状把握、②住民への聞き取りや既存の地域づくり組織とのやりとりを通じた地域課題の深掘り、③事例分析を踏まえた農家と非農家の協力の形の探索、④地域内外の人材や、既存の地域づくり組織の掘り起しとマッチング、⑤豊岡地区の地域デザインを担う農村RMOの形成の支援、⑥地域活動に関する情報発信方法の検討という6項目を掲げた。

(2) 実際の内容

B： 以下のように当初の計画を一部変更して研究活動を展開した。

①統計データ等の分析及び聞き取りを通じて、豊岡地区の財産区や森林の現状を把握した。②ワークショップや山の講に参加し、住民や農村防災RMO研究会のメンバーから地域防災や森林管理に関する課題を聞き取った。③・⑤川根本町と島田市の視察から、組織運営メンバーの確保や活動の展開方法について考察し、ワークショップにて意見交換を行った。④人材の掘り起こしには関与できなかったが、住民との交流を通して課題意識を共有した。⑥豊岡東交流センターのInstagramにてワークショップの内容や地域イベントの様子などを計25件発信し（2024年12月時点）、交流センターで活動内容を展示した。

(3) 実績・成果と課題

10月に発足した農村防災RMO研究会のワークショップにて、豊岡地区の財産区や森林の現状と課題、里山ツーリズムに活用できる地域資源について情報を共有し、意見交換をした。ワークショップにおいては、グリーンズローモビリティを活用した里山ツーリズムを提案した。川根本町視察では、2022年の台風災害時の孤立集落の発生を受け、災害時の物資輸送手段としてドローンを整備し、平常時には集落へのラストワンマイル配送手段としても利用を始めている。視察を踏まえ、2022年と2023年の2年連続で豪雨災害に見舞われた豊岡地区においても、孤立集落発生時に備えたドローンや小回りの利くグリーンズローモビリティの導入を提言した。

森林組合おおいがわの森林整備や木材活用の事例から、豊岡地区の森林の面積や樹種、樹齢などの現状や住民の意向を把握し、地域に適した利用方法を検討する必要があるとわかった。また、ドローンやグリーンズローモビリティは、森林の状況把握や森林内の移動手段としても利用可能である。

島田山村都市交流センターさまの事例からは、地域の人的・資源的容量を把握することの重要性や、イベントの企画者と住民との日常的なコミュニケーションの必要性を学ん

だ。また、NPO法人かわね来風は、様々な地域課題に取り組む中で、その成果が評価され、国の主催した農村RMO推進フォーラムにて事例発表する組織まで発展した。この事例から、豊岡地区でも防災・治山治水、定住人口・関係人口といった現在のテーマに加え、地域の状況に応じた多様な視点で活動を展開することが重要である。

上記のワークショップや視察報告について、Instagramの投稿や交流センターでの展示により、農村防災RMO研究会の活動を住民に周知した。また、いわたおんぱくへの参加や豊岡地区の視察を通して、地域資源を発信する方法を学んだ。

これらの経験をワークショップにおける提案に活かすことができた。豊岡地区の現状に即した具体的な活動内容や将来ビジョンの提案は残された課題となった。

(4) 今後の改善点や対策

改善点としては、豊岡地区に根ざした具体的な課題解決策や地域資源の活用方法を十分に提案できなかったことが挙げられる。今後は、森林管理や里山ツーリズムに関する住民への聞き取り調査や、森林の現状と課題、地域資源の利活用状況の把握により、事業計画や予算などを具体化し、実現可能性の高い課題解決策を提案したい。

また、今年度はより多くの住民の参画と関係人口・定住人口の増加を目指し、Instagramを活用した情報発信を行った。今年度から検討範囲が豊岡東地区から豊岡地区全体へ広がり、連携する団体が増加したが、豊岡地区一丸となって事業を進めるためには、住民に対するさらなる情報発信が望まれる。今後も豊岡東交流センターのInstagramによる情報発信や同センターでの展示を継続するとともに、豊岡地区全体に農村防災RMOの活動を広く発信する方法を探りたい。

5 課題提出者・地域への提言

農村防災RMO研究会の発足により、地域の防災活動に豊岡地区の魅力を結びつけることが可能になった。特に、森林は地域の防災活動と密接に関係する豊岡地区の重要な資源である一方、その維持管理が課題となっている。農村防災RMOを主体として、防災、教育、観光分野における森林の役割を見直し、維持管理の適正化を図り、治山治水の強化が目指されるべきである。防災が住民一人ひとりの意識と行動にかかっている点からは、住民参加型の防災体験イベントはタイムリーな取組であり、さらなる展開が望まれる。

また、豊岡地区は食、自然、文化など多くの魅力を有する。里山ツーリズムによって、これらの魅力をさらに深めることや活用することが可能である。農村防災RMOがプラットフォームの役割を担い、住民や企業、外部人材と協力することで、それぞれの技能や知識などの人的資源を結集し、新たな地域経済を生み出すことができる。この際、既存の地域組織をつなげて小規模な取組から始め、継続的に活動していくことが適当である。こうした活動を通じて、より多くの人が集まり、豊岡地区の魅力を引き出す地域づくりの進むことが期待される。

6 課題提出者・地域からの評価

地域づくりとゼミ生との交流が、ここ何年かの継続によって、ようやくその方向性を見通せる段階になって来ました。今年度発足した農村防災RMO研究会は、治山治水を理念とした邑づくり研究会で、既存の自治会地域づくり協議会では成せない企業と大学との連携プレーによる地域づくりです。地域の現実論・ゼミ生の理想論・企業のシビア論という、それぞれの立場からの議論はやがて収れんされ、新たな地域デザインとして行政側に提案出来ると確信しています。今後は様々なタイプの人材が参画する仕組み作りが重要であり、それをどう展開していくかと同時に、行政側の考え方との整合性を擦り合わせる事が実現へのロードマップであると考えています。

何れにしても、我々が取り組みお願いしている地域デザインとは、短期間では結果が出て来ません。ゼミ生との何年かのお付き合いの中から、新たな課題が見つかりそれをどう解決して行くかです。ゼミ生は年度ごとに替わりますが、そのストーリー性を受け継いで頂けると、より意義深い地域デザインを描けると期待しています。

(豊岡東地区環境保全協議会 代表 乗松洋一)